

## 外苑前であいましょう

ゆづいぐお

2020 東京

お客を待てば時が経つ 売れはしないか気にかかる

ああ外苑前の交差点・・・

あなたと私の合言葉

外苑前であいましょう♪

「またあの唄か・・・。」

自分が口ずさむ夢で、智弘は目が覚めた。昨夜からつけっぱなしのTVでは、もうじき始まる東京オリンピックの事ばかり流れている。あの唄、智弘の母が好きだった懐メロの替え唄が夢に出てくる度に、彼は東京オリンピックの開催が決まった年の事を、思い出さずにはいられなかった。

2013 東京

「おはようございます！ 本日、ビッグイシュー最新号発売日です！」

外苑前の地下鉄出口から、波のうねりのように、人がはき出されていく。近くの工事現場では、智弘がこの仕事を始めた頃の、半分の高さにまで解体工事が進んでいた。

「ビッグイシュー、本日最新号発売日です！」

朝の通勤時間は、人の多いわりに売れないと、智弘も半ばあきらめているのだが、波のうねりにいくら訴えても、ほとんど何も返ってこない虚しさに、彼はまだ慣れていなかった。

それでもこの頃は、常連客も付きだし、何時、どんな人がこの交差点を通るのか、だいたいわかる。老若男女、外国人、時に有名人、毎日必ず声をかけてくれる初老の男性、わざわざ別の日に買ってくれる親子、2日おきに来る陽気な喫煙所監視員のおじさんたち・・・。いつしか彼は、外苑前交差点が好きになっていた。

ビッグイシュー、ホームレスの自立を支援する雑誌、売っている販売員はホームレスである。売れば売るほど収入アップになる完全歩合制で、ベテラン販売員達は毎日のように、ビッグイシューの塊を次々に仕入れていく。智弘はそれを見る度、自分の仕入れ分の薄っぺらさが、自分の人生の薄っぺらさに思えて嫌になった。

昨年の夏、彼はホームレスになった。関東各地をさまよい、所持金も生きる気力も使い

はたした末にたどりついたのが、東京・渋谷だった。日本の誇る、首都東京で再起を……。そんな気持ちがあれば、彼はおそらくホームレスにはなっていない。ただ空きっ腹を満たすためだけに、炊き出しの列に並ぶ日々。だがこの仕事は、彼を炊き出しの列から遠ざけた。ハローワークや求人サイトで見つかる仕事に比べたら、彼の身入りは僅かであったが、その僅かな身入りが、静かに彼を変えようとしていた。

ある月初め、まだ手袋なしでは手がかじかむ午前中のこと、智弘にとって少しうっとうしい常連客が、外苑前にやって来た。

「トモヒロサーン！ アタラシイノ、イツサツクダサーイ！」

微笑みながら、キラキラ光る瞳が、智弘にとっては冷たい風のように痛い。

「マイクさん、おはようございます。いつもお買い上げありがとうございます……」

「トモヒロサーン！ ドウデスカ？ ミエナイセカイヲシンジテミマセンカ？」

「あー、まだ見える世界の事で手がいっぱいなもので……」

「まただよ」、という思いを飲み込んで、智弘は笑顔を作った。

「トモヒロサーン！ ミエナイセカイヲシンジテコソ、カミサマニヨツテ、ミエルセカイモメグマレルノデス！」

マイク・ワタナベ。渋谷界隈のホームレス達には、そこそこ名の知れた宣教師である。

彼はホームレスへの伝道活動を柱として、毎週末の路上礼拝や、夜回りなどをしていた。

智弘とも、路上礼拝での炊き出しをきっかけに知りあった。日系人の穏やかな顔から、時に鋭い事を口にする。智弘はそれが好きでもあり、嫌いでもあった。

「あのう、バックナンバーありますか？」

常連の若い女性客をきっかけに、智弘はマイクから視線を外した。マイクも越えてはいけない一線は心得ていて、

「トモヒロサーン！ また、レイハイキテクダサイネ！ ミエナイセカイ、ダイジダヨ！」

さつきより大きな笑顔で去っていった。

智弘の寢床は、渋谷のとある軒先である。ダンボールをしき、毛布を頭までかぶって眠りに入るその場所は、彼の唯一ともいえる安らぎの場所だった。たまのネットカフェより深い眠りにつける位である。しかしその夜は、昼間のマイクの言葉と亡母の幻影が、彼はある夢へと導いた。その夜が「あの唄」を聞いた初めての夜だった。

あなたと私の合言葉

外苑前であいましょう

渋谷の雑音と亡母のぬくもりとを歩き来しながら、智弘は久しぶりに夢をみた。

「あの唄」、母が好きだった流行歌が、歌詞を変えて流れてくる。気が付くと、母が彼の傍らに座っていた。その姿は老女ではなく、若き日の母の姿だった。ちょうど「あの唄」が流行った頃の母だろうか。

「智弘……。」

若い女性の声だが、確かに母の声だった。

「智弘、あなた、目に見えるものばかり追いかけていない？」

「母さん、今の俺は、目に見えるものすべて失ったんだよ。今更、何を追いかけるのさ？」

「あなたには、目に見えないものがまだたくさん残っているわ。」

「目に見えないもの？」

「そう、目に見えないものを大事にしないと、結局目に見えるのものも失ってしまうのよ。」

どうやら、マイク宣教師の言葉にひどく影響された夢だと、彼は不快になった。しかし同時に、生い先短い母が、そのような事を言っていたのを思い出した。それは財産といえる財産を残さなかった母が、彼に残した言葉だった。彼は夢の中で、再び彼女に問うた。

「そんなものは後まわしでいいよ。俺は、金や仕事、住まいが欲しいんだよ。今すぐに！」

「一度、今の生活を見つめ直してみなさい。あなたがどれだけ目に見えないものによって支えられているか、それが……。」

母が言い終える前に、智弘は現まに戻された。外は、ダンボールを片づけなくてはならぬ位に明るい。ダンボールをそつと元の場所に動かしながら、彼は最後に母に応えた。

「母さん、見えないもの、探してみるよ。」

その日もまた、智弘は外苑前の交差点に立った。

「ビッグイシュー、発売中です！」

片手で最新号入りのファイルを持ち、彼の横にはダンボールで作ったディスプレイが立つ。このところ、このつたないディスプレイに目をとめる人が増えてきた。一冊の利益はわずかであっても、売れば売れる程、身入りは大きくなる。それは彼に残された、唯一といてもよい、「見えるもの」であった。

智弘は、それまでの人生で、「見えるもの」しか追い求めなかった。金、仕事、モノ、時に女。しかし、今の彼には「見えるもの」は皆無といってもよい。

「すいません、新号とバックナンバーください。」

いつも親子で買ってくれる娘さんが、小銭を用意しながら微笑んだ。

「いつもありがとうございます。あのう、ちょっと聞きたいのですが、何でもいつも買ってくれるんですか？」

「フフフ……。それはあなたの笑顔。」

「????」

「ビッグイシューを渡してくれるあなたの笑顔を見ると、心が暖かくなるんです。」

智弘には考えられない答えだった。愛想が良いとはいえない自分が他人の心を暖かくするとは。

「そうか!」

彼の心に稲妻が走った。その瞬間、母やあの宣教師が言った事でさえ、少しわかった気がした。この世は「目に見えるもの」によって成り立っている。でも、人の気持ちや出会いなど「見えないもの」があるからこそ、「見えるもの」が動くのだ。今、このお客さんがビッグイシューを買ってくれたように。

「見えないもの」を見つける……。あの日以来、彼は目に見える結果だけを追い求めなくなった。無論、すぐには彼の生活は変わらない。しかし智弘は、一日、一時間、一分、一秒、何かわからないが、「見えないもの」を心に置いて生きるようになった。それは、アメーバのように形を変えたが、確実に彼の生きる土台となっていた。

ある就業相談員が彼に、

「アンタ、最近顔が良くなってきたよ。もうじき『卒業』かもナ。」

そう言ったのもその頃だったかもしれない。

東京オリンピックの開催が決まった9月、智弘の仕事と住みかも決まった。

2020東京

「○×選手、金メダル! 三連覇達成!」

カーラジオを聴きながら、智弘は渋谷の取引先へ急ぐ。道すがら、あの交差点を通った。

「俺の見えない宝物だな。」

愛想よくビッグイシューを売っている販売員に後髪引かれながら、彼はハンドルを右に切った。

——はじめから、あそこには「見えないもの」があったのだ。俺の中にも「見えないもの」があったのだ。——

智弘は、今夜も夢の中で口ずさむ。

あなたと私の合言葉

外苑前であいましょう♪

## 選評

よくできている小説です。何がよくできていると言  
って、おそらくゆういくおさんご本人とおぼしき人  
物を、客観的に見つめて智弘という主人公に作り直  
し、フィクションの作品に仕上げたことです。自分  
の話を、外側からの目まで含めて書いている。これ  
ぞ、小説だと思います。他の登場人物たちも、しっ  
かりとした役割を持っていますね。智弘を支え、智  
弘に支えられ、という相互の関係であることが、説  
明ではなく、読むとわかるようになっている。2020  
年が楽しみです。（選評・星野）